

マイスター・エックハルトについての祈り：『主の 祈りの論考』を中心に

石川 充ユージン
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/7348040>

出版情報：九州ドイツ文学. 37, pp.1-11, 2023-10-31. VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン：
権利関係：



マイスター・エックハルトについての祈り

—『主の祈りの論考』を中心に—

石川 充ユージン

はじめに

マイスター・エックハルト (ca.1260-1328)¹⁾の著作はどのように読まれるべきか。この問いに対する明確な答えを、われわれは今なお得られていないように思われる。エックハルト校訂版全集の編集にも携わったフィッシャーが、「多様なエックハルト解釈が試みられることから、彼の思索について多くが知られぬままであって、その意義が正しく評価されて来なかったことが推測される」²⁾と述べてから、すでに半世紀が経とうとしている。彼は引用という行為に関して次のような見解を述べている。

個々の引用はそれ自体多くを語らない。時には引用者の意味を多く含み、引用される作者の意味をほとんど、あるいは全く含まないこともある。それらの引用が個々の哲学者の思惟活動において、どのような意味を要求してよいのか、要求しうるのかについては、都度問われるべきである。³⁾

後世のわれわれがエックハルトの著作を手に取り、その思想に触れる中で、彼の記述そのものの意味を尊重しようとするならば、彼が著作を残した意図を想定しながら著作を読み解くべきであろう。読者がエックハルトのテキストを如何様にも味わう権利を有していることを否定することはできない。しかしながら、それを残したエックハルトの意図は、彼の置かれた立場と思想内容のどちらかを考慮しても、神の教説を適切な形で提供することの一つに還元されると思われる。例えば、彼が説教を施した当時の民衆にとっては、説教師による説教がキリスト教の教えに触れるための数少ない機会であった。民衆の信仰のあり方が説教師の言葉一つで簡単に左右されてしまう時代において、エックハルトは民衆の前に立ち、説教を執り行うよう求められていた。さらに、彼が所属していたドミニコ会自体、異端者の改宗を第一の目的とし、異端者との論争に勝利するために大学での学問研究に積極的に取り組む修道会であった。これを考慮するならば、十代半ばに修道院学校に籍を置いて以来、生涯ドミニコ会に所属し、一時は総長代理にまで上り詰めたエックハルトが、民衆教化のための説得力ある説教を行うという自らに課された使命を軽んじていたとは到底考えることはできない。本編は、彼の著作の検討から得られた解釈を全ての読者が合意すべき思想として扱うものでもなければ、それを正典として強要するよう意図するものでもない。しかしながら、以上のようなエックハルトとその周囲の人々が置かれていた

状況は、彼の著作に解釈を施すうえでやはり考慮されるべきであろう。

著者がどのような目的をもって思想を展開したのか、その手がかりを得るために最も有効なテキストの一つは、エックハルトのラテン語著作の中では、最初期の『主の祈りの論考』である。最初期の著作の主題が祈りであるということは、エックハルトの宗教観を捉えるうえで重要な意味を持つ。20世紀ドイツの宗教学者ハイラーが「祈りがあらゆる宗教の核心であり、中心点であることに対しては、いささかの疑いもない。教義や制度の中でも、儀礼や倫理的理念の中でもなく、祈りの中で、われわれは本来的な宗教的な生を捉えるのである」⁴⁾と語るように、祈りは宗教の本質を反映する素朴な宗教行為である。エックハルトが宗教観の本質を反映する祈りについて自らの立場を表明している『主の祈りの論考』の内容を考察することは、彼の宗教観を明るみに出すだけでなく、最初期の思想の特徴を知ることを可能にする。それによって、エックハルト思想の出発点が明らかとなり、全体像を体系的に捉えるための足掛かりとなることが期待される。この小論は、『主の祈りの論考』の具体的な記述を手がかりとして、根源的な宗教行為である祈りがエックハルトにとって有している意義を検討することによって、彼の出発点における信仰の図式を把握することを目指すものである。

1. 『主の祈りの論考』について

『主の祈りの論考』は正確な執筆年代が確定されていないものの、青年期のエックハルトの手によって記されたとされるラテン語著作である。その構成としては、まず解釈の前に祈りに関して注意すべき点が挙げられたのち、新約聖書「マタイによる福音書」第6章第9-13節および「ルカによる福音書」第11章第2-4節においてイエス・キリストが弟子に説きたいわゆる「主の祈り」のキーワードと祈りの聖句に関して、さまざまな教父の言葉の引用とともにその意味と根拠が提示される。

この論考を読み解くことで、エックハルトの思想の出発点を定位し、変化し複雑さを増していった彼の言説の核を捕捉できる可能性を秘めているにもかかわらず、先行研究においてこの論考の意義をテキストに即して明らかにすることを試みた論考は管見の限り確認できず、研究者の間で等閑に付されている観が強い。それはおそらく、この著作が抱えている問題の故であると考えられる。校訂版テキストの編纂者であるゼーベルクによれば、著作の大部分が古代教会における代表的神学者である教父たちからの引用で占められており、エックハルトはこれらの引用を主としてトマス・アクィナスの有名な福音書解釈『カテナ・アウレア』（黄金の鎖）からとっている。⁵⁾したがって、『主の祈りの論考』からエックハルトの思想の独自性を直接引き出すことはまず困難であると言うべきである。さらにゼーベルクは、文章がしばしば未完成ないし中断しており、それらが基づいている原典によって初めて完全に理解可能になるという、この著作のある種の文体的かつ内容的ないい加減さを指摘している。⁶⁾この指摘に対しては、エックハルトが引用している原典を参照しさえすれば本当に彼の文章を完全に理解できるのかという疑問は残る。しかしいずれにせ

よ、最初期の著作であるということだけでこの著作はエックハルトの思想全体においても特別な価値を有しているはずである。それにもかかわらず、他のドイツ語著作やラテン語著作に比してもほとんど考察対象とされなかったのは、上のような事情によるものであろう。

以上のような問題を内包する『主の祈りの論考』であるが、本論はそのテキストの省略部分を考慮することなく、実際に記述され、残されている記述からエックハルトの見解を引き出すことを試みる。意図して文体を選択した可能性がある以上、記述されていない内容を想定し、彼の語る言葉と言葉の間に補足を加えた時点で、その著作の内容はエックハルト自身の考えそのものから逸脱することになるからである。断片として残された作品からも、その著者の意図や思索の一端を捉えることは十分に可能であるという立場をとったうえで、『主の祈りの論考』のテキストの検討に移ることにする。

2. 「時間的なもの」の拒絶

『主の祈りの論考』を読み進める上でまず注意すべきは、エックハルトが聖書の前後の文脈に一切触れていない点である。聖書の記述に即しつつ「主の祈り」を「信仰上の助言を求める者たちに対して、神の有益な忠告として祈りの形式を示した」⁷⁾ものであると説明しているトマスの『カテナ・アウレア』とは対照的な態度である。「マタイによる福音書」では山の上で弟子たちと群衆のために語ったいわゆる「山上の垂訓」の中で、「ルカによる福音書」では弟子の一人に対して、イエスは「主の祈り」を模範的な祈りの仕方として教えたという経緯がある。しかし、エックハルトは『主の祈りの論考』においてこうした背景に一切触れることなく、すぐさま「主の祈り」の解釈に着手するのである。

個々の聖句の解釈に先立ち、エックハルトは祈りに関する四つの事柄に関して次のような注意を促している。この一節は初期のエックハルトにおける神と人間の位置付けに関して重要な示唆を与えてくれる。

第一に注意されたいのは、聖なるものに対してわれわれが無頓着であるために、主はわれわれに請い願うよう勧めていることである。第二に、主はわれわれのそばで愛をもたらしされる。すなわちわれわれが「まだ遠くにいる」場合は呼び戻され、われわれの目を覚まされるのである。第三に、主の慈しみに注目されたい。主は与えることを必然としているほどに善き方である。第四に注意すべきは、いかなる時間的なものも神に祈ってはならないことである。⁸⁾

ここではまず神に祈りを捧げる当事者である人間について、聖なるものに対して無頓着な(desides)側面が指摘されている。その一方で神は人間のそばにあって、人間に愛をもたらしす。「遠くにいる」という言葉が持つニュアンスはこの文脈でははっきりしないが、そのような状態にある人間を呼び戻し、その目を覚まさせるという。ここでエックハルトが1294

年頃エルフルト修道院長として弟子のために執り行った『教導講話』に見られる記述「人間は、欠陥や、弱さや、その他のことを理由に、自らを神から遠く隔たっていると決して考えてはならない。〔中略〕汝はあくまで神を自分に近いと見なすべきである」⁹⁾を考慮するならば、ここで言われる遠さとは空間的な意味ではなく、人間がその意識ないし認識において想定する、神との間に広がる隔たりを指すものであると考えられる。しかしエックハルトはそのような遠さを想定することを良しとせず、むしろ人間のそばに神を位置づけている。

また、善として与えることを必然とする神に関する理解は、『カテナ・アウレア』に取り上げられている、アウグスティヌスが祈りの必要性に関して表明している次のような見解にほとんど等しい。

神がわれわれに必要なものをすでに知っているのならば (si Deus iam novit quid nobis necessarium sit)、祈りの意図そのものがわれわれの心を浄化し、神から霊的に注がれる賜物の受容に働きかけるという理由でなければ、どうして祈りそのものが必要となろうか。神は懇願によってわれわれの願いを聞き届けるのではなく、常に自らの光を与える用意をしている。しかしわれわれは、他のことに心を傾けているときには、常に賜物を受け入れる用意をしているのではない。すなわち、祈りにおいては、身体が神へと転回し、内的な目が浄化されることになる。そのとき、切望されていた時間的なものが排除されることで、純一な心の目は純一な光を獲得し、至福の生を完成する喜びをもってこの光のうちにとどまることができるのである。¹⁰⁾

神は人間のために与えることを旨としている。しかし人間が神ではない他の事柄に心を向けていることがあるために、祈りは人間が賜物を受け入れる準備を整えるために必要な手段として捧げられるのである。祈りに関する理解が彼らに共通しているというこのような事実には、エックハルトがアウグスティヌスから強い影響を受けていることが示唆されている。

続けて第四の注意事項として挙げられるのは、時間的なものを求める祈りの禁止である。他の三つの注意事項はただ列挙されるのみであった一方で、エックハルトはここで複数の根拠を示しながらその意味を説いている。そのため、時間的なものを求める祈りの禁止は彼にとって特に重要な事項であったと見なしてよいだろう。先に挙げられる三つの根拠は、「主の祈り」自体に時間的なものが含まれていない、神が時間的なものを随所で放棄すべきとしている、永遠なる神が与えるには相応しくない¹¹⁾、といったように、「主の祈り」および神の性質にその理由を帰するものである。第一の根拠に関しては、仮にエックハルトがここで祈祷文の言葉自体の内に時間的なものを認めない立場をとっているとするならば、『エンキリディオン』において、「主の祈り」の七つの祈願のうち、三つにおいて永遠的なものが求められ、残りの四つにおいては時間的なものが求められるとして区別するアウグスティヌス¹²⁾以上に徹底的な見解を示していることになる。エックハルトがのちの著作で

展開することとなる、「一」なる神と「多」なる被造物を徹底的に区別する議論¹³⁾を考慮するならば、彼が「主の祈り」を純粹に神によるものとして扱うためにこうした立場を取っていても不思議ではない。しかし、『主の祈りの論考』においてはこれ以上の説明がなされていない以上、この根拠が意味するところを著作の文脈から断定することはできない。

三つの根拠が神の性質と聖書のテキストに依拠して挙げられる一方で、第四の根拠は、「時間的なものが永遠なるものに比して無である」¹⁴⁾というように、時間的なものに焦点を当てる形で提示されている。永遠的なものとの比較を前提しているとはいえ、エックハルトは時間的なものを「無」であると断言する極端な立場をとるのである。このような彼の立場からは、第一の根拠と共通して、時間的なものと永遠的なものを峻別しようとする意図がうかがえる。アウグスティヌスの見解に即した形で祈る目的を理解している一方で、時間的なものと永遠的なものの相違を際立たせんとするエックハルトの姿勢はアウグスティヌス以上に徹底的であるといえる。

3. 「国」を熱望する祈り

エックハルトが『主の祈りの論考』で示す祈りは、神から賜物を得るための手段に留まらない。彼は教父からの引用を多用しながら、祈りとは神との関係を確認するための宣言としての側面を有するものであると理解している。『主の祈りの論考』が「主の祈り」のテキストから最初に解釈する語句は「父」である。祈る者が「父」と唱える理由は、キリストから神の子となる力を獲得したことや、相続人でもあることを知るためである。¹⁵⁾これに続けてエックハルトは、クリュソストムスの言葉から、以下の記述を引用している。『父』と言った者は、罪人の贖い、子として受け入れられること、相続人であること、独り子と兄弟であること、聖霊の賜物を認めた。¹⁶⁾すなわち、祈る者は自らが「子」であることを悟るために神を「父」と呼ぶのである。エックハルトが父と子について言及するとき、われわれにまず想起されるのは、「父はその御子を永遠の内に自らに似せて生む」¹⁷⁾、「御子を私の魂の中で生んだ」¹⁸⁾といった記述で知られる、いわゆる「魂における神の子の誕生」であろう。しかしこの時点のエックハルトは、「主の祈り」の「父」から父なる神と子なる人間という関係を見るに留まっている。また、エックハルトは祈る者が「子」として独り子と兄弟である自覚を得るとするクリュソストムスの言葉を引用しているが、あとになって「高貴で謙虚な人間にとっては、神の独り子であることも十分でない」¹⁹⁾など、人間を三位一体における子であるキリストのみに許された名づけである独り子に優るものとして扱うような主張を行うようになる。エックハルトは自らの思想を展開するうえで、こうした極めてラディカルな表現を用いることにも躊躇しない。しかし、そのような彼も初期においては、正統信仰に忠実な形でキリスト教における父と子の概念を理解していたのであった。

エックハルトが天と地をどのように位置づけていたか、これを明らかにしてくれるのは、聖句「天にまします」に対する解釈である。この聖句に関する引用は、エックハルトが天にいる神のために時間的な地上の事物を拒絶するよう、祈る者に対して求めていることを

示唆している。クリュソストムスからは、「われわれは父が天にいることを知っているのだから、地上の諸事物に身を捧げることは恥すべきである」²⁰⁾という言葉を用いし、カッシアヌスからは、「現在の地上で過ごす生は、われわれを父から遠く隔てるものであるから、われわれはそれを全くもって嫌悪すべきである」²¹⁾、「われわれが父を有していると認めているかの国へと、心から願いながら急ぐべきである」²²⁾という説得的な言説を引いている。これらの引用を見る限りでも、永遠なる神と時間的なもの同様に、エックハルトが天と地の間で明確な区別を付けようと試みていることが分かる。

また、エックハルトは神が何よりもまさって神聖なものでなければならないと考える。彼が神の尊さをどこまでも追い求めていたことは、聖句「御名が崇められんことを」に対してなされた次の解釈から明らかなである。エックハルトは「御名が崇められんことを」という祈りから、まず神の偉大さを強調する意味を見出す。これを示すにあたって、彼は引用の出所を明らかにしてはいないものの、アウグスティヌス由来であると思われる次の言葉を引用している。「すべての人によって何ものも〔御名より〕聖なるものとは見なされないように、(御名が)知られますように (ita innotescat, ut ab omnibus nihil sanctius aestimetur)」。²³⁾ また、この祈りが神の賛美として解されると、エックハルトにおいては次のような意味合いを持つ。『崇められんことを』とはつまり、『御名が賛美されんことを』、と言われているのであって、これは万物において『我らの父の栄光のために一切の情熱を傾け』(pro nostri patris gloria totum impendamus affectum)、『我らの願い、我らの喜びが我らの父の栄光であることを宣言するためである』。²⁴⁾ 彼にとって神の賛美とは、即ち自らの一切の情熱を捧げることを意味する。それによって、祈る者は自らが望み、そして得られたものの一切が神の栄光のためにあることを自覚し、表明するのである。

「崇められんことを」に続けてエックハルトが述べるのは、「御国が来ますように」についての解釈である。この祈りの「国」が一般的な概念を指し示すものではないことはいくまでもない。「主の祈り」においてこのように祈る目的の一つとしては、さまざまな悪徳を根絶することで悪魔を追い払ったのち、神が「われわれのうちで」「さまざまな徳の香りによって」支配するようになる²⁵⁾ことが挙げられる。この解釈を見る限り、「国」が意味するところは神の支配である。しかし、彼はさらに「汝の」国といわれていることに着目し、その理由として以下の二つを挙げる。「神は永遠であり、本来の意味における霊だからである。その国は物的であったり、時間的であったりするものではなく、いっそう高貴な国である」。²⁶⁾ 「霊において、永遠性において、『国』、すなわち神の力、知恵、善性、豊かさ、栄誉が現れるからである」。²⁷⁾ 神の支配に加えて、ここでのエックハルトは神のもつ性質それ自体を「国」と見なしている。

また、「国」は物的でも時間的でもないために、物質的な何らかの形をとることも、時が経過する中でその到来を待たれるものでもない。それでも、エックハルトはそのような「国」を祈るよう求めるのである。また、彼における祈りとは、「国」の到来と同時に天と地の一致を願うものである。彼はクリュソストムスから以下の文を引用している。「主は『御国が来ますように』ということによって、天のものを求めるよう教えており、天に到達

する前に、『御心が行われますように、天におけるように地の上にも』ということで、主は地そのものが天になるよう命じている」。²⁸⁾ 崇められるべき神のために時間的なものを拒み、情熱を全て神に向けた先に、神は到来し、地上の生は天の生へと変貌を遂げるのである。

『主の祈りの論考』では祈りに向かう心構えとその意義が以上のような形で理解されている。しかし、これとは対照的に、ドイツ語著作『教導講話』においては、エックハルトは自らの理想とする祈りを非常に極端な表現を用いて説いている。まず、理想的な祈りの形が次のように説かれている。

最も強力な祈り、一切を獲得できるような最も全能の祈り、そしてあらゆる行為の中で最も価値ある行為、それは自由な心から (ûz einem ledigen gemüte) 出てくるものである。心が自由であればあるほど、祈りと行為は、いっそう強力で価値があり、有益で、賞賛すべき、完全なものとなる。²⁹⁾

ここでも具体的な儀式としての祈りは語られず、祈りとはどのようなものかについて語られている。時間的なものを否定し、神の御心の地上での実現を目指した彼は、祈る人間の心が自由であることを求めた。彼によれば、自由な心とは、「何ものにも惑わされず何ものにも縛られず、己にとって最も善きものをいかなる方法にも縛り付けず、何ものの内にも自らのものを見ず、むしろ最も愛すべき神の御意志に完全に没頭し、己の意志を放棄した心である」。³⁰⁾ 自由な心は、祈りに利己的な目的や具体的な手段を一切求めない心である。むしろ、自由な心で祈る者は自らの意志までも否定し、神にひたすら帰依するのである。理想的な祈りの条件が自由な心であることを踏まえて、彼は弟子たちに対して理想的な祈りのあり方を次のように説く。

それ故に、人間の手足や力、目や耳、口、心臓、すべての感覚が祈りに向けられることを願うほど、力強く祈るべきである。そして、祈る相手は今己のもとにあるわけであるが、その相手と一つになろうとしていると感じるまで、祈りを止めてはならない。その相手こそ神なのだ。³¹⁾

『主の祈りの論考』同様、祈りによって目指されるべき対象は神である。しかし、その過程と実現の仕方がさらに極端化し、祈りの思想を契機にして「合一」概念がここで姿を現す。神を讃えるために情熱を向けるのではなく、自らの意志を捨て去る。真の意味で神に没頭するためには、そのための手段も排除しなくてはならない。そして神に至るための中間項が取り除かれなければならない以上、神への祈りの終着点は合一しかあり得ないのである。以上確認した内容を踏まえると、『教導講話』で説かれる祈りの原型が、すでに『主の祈りの論考』に見られることは明らかである。

「国」の解釈によって、エックハルトは信仰上の理想状態を示しているわけであるが、このような国が地上に実現することを立証するためには、ここで生じるいくつかの問題が解

決されなければならないと考えられる。神や霊といった神的概念が現世的でないならば、何であるといえるのか、またエックハルト自らが現世的側面を認めない「国」が地上において実現するとはどのような事態を指すのか、それはまず可能なのか、といった問題がすぐに提示されよう。しかし、エックハルトは『主の祈りの論考』でこうした問いに対して答えを与えていない。しかしそれでも、この著作において、彼が神と現世の領域を厳密に区分したうえで、その神が天上と同様に地上を司ることを望んでいることは明らかである。

おわりに

最後に、先に引用したアウグスティヌスの一節を再び取り上げてみたい。

祈りにおいては、身体が神へと転回し、内的な目が浄化されることになる。そのとき、切望されていた時間的なものが排除されることで、純一な心の目は純一な光を獲得し、至福の生を完成する喜びをもってこの光のうちにとどまることができるのである。

この記述によれば、アウグスティヌスにおける祈りとは、人間が光をもたらし続ける神から賜物を受け入れるために必要な、他の事柄ではなく神の方へ姿勢を改める行為である。こうした見解の方向性自体は、エックハルトが『主の祈りの論考』で説く祈りのそれと大きく重なっている。しかし以降のエックハルトは、時間的なものと神的なものの区別をさらに徹底した結果、『教導講話』において自由な心で神に向き合う祈りを弟子たちに説くのである。

エックハルトが『主の祈りの論考』の中で説く祈りにおいては、具体的な事物がその対象となることは許されない。なぜなら、大前提として神は永遠であり、そのような神に対して時間的な具体的な事物を求めることは、神の永遠性に矛盾するからである。また、神は父として、何よりも神聖なものとして崇められるべきであり、そのためにエックハルトは情熱の全てを神に向け、それを賛美の証としようとする。また、神の支配あるいは神そのものである「国」が、人間の住まう地上で実現することも願っている。これらの思想は基本的にラテン教父とギリシア教父の言葉に則っており、異端を思わせるような主張を展開するにはまだ至っていない。エックハルトにとっての祈りは、『主の祈りの論考』の段階ではキリスト教の伝統に多くを依った、祈る者が時間的なものを求めずに神の賜物を請願すること、神より賜物を受ける者であることを自覚し、宣言するためのものである。しかし、彼の思想はその後徹底の度合いを増していく。神が神であるために、永遠なるものと時間的なものを徹底的に区別する必要に駆られた彼は、祈りの対象である神のために、地上的な人間に由来する一切を放棄するよう求めるようになる。意志さえもその例外ではない。そしてこれこそが、エックハルトの思想の中心をなす「合一」の端緒となる。

ラルギアによれば、エックハルトはいくつかのドイツ語説教において、キリスト教において最も代表的な祈祷文である「主の祈り」に言及しており、「主の祈り」においてエッ

クハルトが目指すのは、神が人間を人間から解放し、人間の意志と神の意志とが一つになること、人間が合理的な方法で神の存在と一つになることである。³²⁾『主の祈りの論考』で示されたエックハルトの祈りの原型がどのような進展を経て、ラルギーアの指摘するような祈り解釈に至るのか。この問いに答えをもたらすことは、彼の思想の変遷を明らかにし、彼の思想の解明を目指すための道筋の一つとなるであろう。

注

- 1) エックハルトのテキストは以下のものを使用した。

Meister Eckhart, *Die deutschen und lateinischen Werke*. Hrsg. im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Stuttgart 1936ff. (Deutsche Werke = DW; Lateinische Werke = LW)

なお、略号は以下の通り。

Tr. s. Or. Dom.: Tractatus super Oratione Dominica; 『主の祈りの論考』

RdU.: Die Rede der Unterscheidung; 『教導講話』

Pr.: Predigt; 『ドイツ語説教集』

In Sap.: Expositio libri Sapientiae; 『知恵の書註解』

- 2) Heribert Fischer, *Meister Eckhart. Einführung in sein philosophisches Denken*. Freiburg/München: Verlag Karl Alber 1974, S. 7.
- 3) a. a. O. S. 10.
- 4) Friedlich Heiler, *Das Gebet*. München: Verlag von Ernst Reinhardt ³1921, S. 2.
- 5) Vgl. LW V, S. 105.
- 6) Vgl. LW V. S. 106.
- 7) Thomae Aquinatis, *Expositio in Matthaeum*. In: Catena Aurea in quatuor Evangelia I. Taurini: Marietti 1953, S. 103.
- 8) Tr. s. Or. Dom. n. 1. LW V, 109, 1-6. なお、引用鍵括弧部分の原文は引用符を用いて 'adhuc longe' と表記されている。
- 9) RdU. DW V, 249, 9-250, 2.
- 10) Thomae Aquinatis (1953), S. 102f.
- 11) Vgl. Tr. s. Or. Dom. n. 1, LW V, 109, 7-9.
- 12) Vgl. Augustinus, *Enchiridion ad Laurentium, seu de fide, spe et caritate*. E. Evans (ed.) In: Corpus Christianorum Series Latina 46. Turnholti: Typographi Brespols 1969, c. 30, n. 115, S. 110.
- 13) Vgl. In Sap. n. 152. LW II, 488, 9-14.
- 14) Tr. s. Or. Dom. n. 1. LW V, 109, 9.
- 15) Vgl. Tr. s. Or. Dom. n. 2. LW V, 109, 12-110, 2.
- 16) Tr. s. Or. Dom. n. 2. LW V, 110, 2-4.

- 17) Pr. 6. DW I, 109, 2.
- 18) Pr. 6. DW I, 109, 4.
- 19) Pr. 14. DW I, 239, 4-5.
- 20) Tr. s. Or. Dom. n. 4. LW V, 111, 3-4.
- 21) Tr. s. Or. Dom. n. 4. LW V, 111, 5-6.
- 22) Tr. s. Or. Dom. n. 4. LW V, 111, 7-8.
- 23) Tr. s. Or. Dom. n. 5. LW V, 112, 11-12. なお、『カテナ・アウレア』にもアウグスティヌスのものとされる同様の見解が次のように挙げられている。「神の名が³聖なるものでないためにこのように祈り求められるのではなく、人間によって神の名が³聖なるものと見なされるように祈られるのである。したがって、何かもっと聖なるものがあるとは見なされることのないように、神が知られるために (ita innotescat Deus ut non aestimetur aliquid sanctius) 祈られるのである。」(Thomae Aquinatis (1953), S. 104.) これに対してエックハルトが「すべての人によって」(ab omnibus)、「何ものもそれより聖なるものでない」(nihil sanctius) という表現を用いている点にも、彼の信仰の徹底したあり方が見て取れる。
- 24) Tr. s. Or. Dom. n. 5. LW V, 112, 12-113, 2.
- 25) Vgl. Tr. s. Or. Dom. n. 6. LW V, 114, 9-10.
- 26) Tr. s. Or. Dom. n. 6. LW V, 115, 3-4.
- 27) Tr. s. Or. Dom. n. 6. LW V, 115, 4-6.
- 28) Tr. s. Or. Dom. n. 7. LW V, 116, 4-6.
- 29) RdU. DW V, 190, 3-6.
- 30) RdU. DW V, 190, 9-12.
- 31) RdU. DW V, 191, 1-4.
- 32) Vgl. Meister Eckhart, *Meister Eckhart Werke I*, hrsg. von Niklaus Largier, Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 2008, S. 923.

Das Gebet bei Meister Eckhart

—— Mit Fokus auf dem „Tractatus super Oratione Dominica“ ——

Michiru Eugene ISHIKAWA

Der vorliegende Aufsatz untersucht die Bedeutung des Gebets bei Meister Eckhart auf der Grundlage seiner frühen lateinischen Schrift „Tractatus super Oratione Dominica“ und versucht, die darin entwickelte Form des Glaubens zu erfassen.

Zunächst widme ich mich der Haltung, die Eckhart von den Betenden verlangt. Im Zentrum steht dabei der Beginn der Schrift, wo Eckhart sein Gebetsverständnis darlegt. Die Auffassung, dass das Gebet ein Mittel ist, um das Herz auf Gott auszurichten und sich auf die Annahme seiner Gaben vorzubereiten, teilt Eckhart mit Augustinus. Insofern das Gebet nicht auf das Zeitliche zielt, spiegelt sich darin Eckharts Versuch, zwischen dem Zeitlichen und dem Ewigen zu differenzieren.

Welche Bedeutung Eckhart dem Gebet beimisst, rekonstruiere ich daraufhin anhand seiner schrittweisen Auslegung der einzelnen Gebetsworte. So erkläre sich die Anrede Gottes als ‚Vater‘ aus dem Bewusstsein der Betenden, Kinder Gottes zu sein. Gestützt auf die Autorität der Kirchenväter argumentiert Eckhart weiter, dass sich mit der Wendung ‚im Himmel‘ die Aufforderung verbindet, das Zeitliche und Irdische aufzugeben. Mit ‚Dein Name werde geheiligt‘ bestätigen die Betenden die Größe Gottes und erkennen, dass alle Wünsche und Freuden zu Gottes Ehre dienen. Unter dem Reich Gottes (‚Dein Reich komme‘) versteht Eckhart einen Zustand göttlicher Herrschaft, deren Ankunft zu erbitten ist. Ein Blick auf die mittelhochdeutsche Schrift „die rede der underscheidung“ kann Eckharts Verständnis einer idealen Gebetsweise, die ohne eigenen Willen auskommt, vertiefen. Aus dieser Schrift erhellt, dass die Vereinigung mit Gott für Eckhart die höchste Form des Gebets ist.

Eckhart sieht das Gebet als einen Akt der Bitte um die ewige Gabe Gottes und als einen Akt der Bewusstwerdung und des Bekenntnisses, Empfänger der Gabe Gottes zu sein. Aber die Notwendigkeit einer gründlichen Unterscheidung zwischen dem Zeitlichen und dem Ewigen veranlasst ihn, zu einem Gebet aufzurufen, bei dem für Gott sogar der menschliche Wille „gelassen“, also aufgegeben wird.